



〈第五十三回〉

若い人たちに語り継ぎたい、
次の世代に残しておきたい。
貴重な話をお届けしますー。

あすへひとこと

いつの時代までも残したい

邑楽町の昔ばなし



現在、赤堀十軒の北側は田畑が広がり、その南側には今も山が残っています。夕方、訪れると夕日に照らされて、何か神秘的な感じがします

鞍掛山の狐の嫁入り

昭和の初めまで、赤堀十軒の集落の北側に、鞍掛山という小高い丘陵が連なっていました。丘陵は松と雑木林でした。

この山は耕地整理によって昭和8年ごろ開墾されました。立木は伐採され、開墾されて農地に変わりました。もともとは、西から東へ細長く延びた林が続ぎ、春になるともうせんを敷いたように、ヤマツツジが咲き乱れ、秋には色とりどりの錦が山を飾りました。

また、四季を通して山菜取りやキノコ取りもできて、村人の心に安らぎと豊かな恵みを与えました。その頃は、長柄小学校の一年生の遠足は毎年、鞍掛山と決まっていました。昔、この山にたくさん

の狐が住んでいました。村の人たちは狐をオトカ（お稲荷）と呼んでいました。

オトカはいつも里に下りてきて、おばあさんがかまどでご飯炊きをしているときなど、人懐っこくそばに寄ってきていました。山の近くの農家の庭先では、何匹ものオトカが子どもたちとも仲良くたわむれていました。

その頃、ある話によりますと鞍掛山の西に延びた辺りの茶畑には数多くのオトカの巣があって、冬の繁殖期になると、雄は「こんこん」雌は「くわいくわい」

と鳴いていたそうです。原野に穴を掘って、昼間は中に潜み、夜になると外に出て、野ネズミや野ウサギを食べていました。

暗闇の晩、山の方を眺めると、鞍掛山がぱつと明るくなって、ちようちんがいくつも、いくつも並んでついているように見えました。闇夜になると、こうした現象がしばしば現れるので、近所の人たちがみんな集まってきて、「狐の嫁入りが始まったぞ」といって不思議そうに眺めていました。

人がともしていないのに明かりが見えるのは、キツネが昆虫や鳥獣の死骸や、朽ち木などをくわえて、行き来する仕業によって発光するのだろう、といわれておりました。

この光景を、「狐の嫁入り」と名付けたのは、昔の農家の嫁入りが、自宅で夕刻から夜にかけての婚禮だったからでした。身内の人たちがそれぞれ、ちようちんをつけて花嫁を婚家に送ってきた光景になぞらえたものでしょう。昔は、「狐の嫁入り」の光景があちこちで見られたそうです。



【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会
平成10年12月31日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より



秋の色
(清水公園)



Photo 高根澤高明(記録ボランティア)

ひとりごと From editors

▶味覚の秋、おいしいものがたくさん出回りますね。役場の隣のあいあいセンターをのぞくと、サツマイモなどが並べてあって「秋が来たなー」と実感します。ちなみに私の課ではそこで売られている「おいなりさん」がさっぱりめでおいしいと好評です。▶「おいなりさん」というのは稲荷神の使っている狐の好物に由来するそう。以前、ふと疑問に思い、なぜ狐は油揚げが好きなのか調べてみたことがあります。五行説やネズミの油揚げ、毛の色から由来したなど諸説あるようですが、いくつかの話をまとめると「本当の狐は豆腐の油揚げは好きではないらしいのです。『猫の好物は国によって違う。インドの猫はカレーを食べる』と聞いた時と同じくらいの衝撃を受けました。(栗原)

邑楽町携帯サイト
2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。
携帯用URL <http://www.town.ora.gunma.jp/k>



この広報誌は、自然保護のため
植物油インキを使用しています。